

開発学はいかにあるか

—— 中国にみる非欧米社会の知的可能性 ——

汪 牧耘 (おう まきうん, WANG Muyun)

東京大学東アジア藝文書院

概要：

開発学 (development studies) は、植民地支配や冷戦の歴史的文脈の中で形づくられてきた学問領域として知られています。第二次世界大戦終結後の約 80 年を経て、開発学の射程は「より良い生」や「社会変革」を様々な経験・理論・方法に及んでおり、それらを再定義しようとする議論も広がっています。一方、開発学そのものに対する批判も絶えることなく、なかでも開発学における知識生産の「欧米中心主義」が構造的な問題として多く指摘されてきました。

それに対して、近年、経済大国だけでなく、知的生産者としても台頭してきた中国は、従来の開発学に転換をもたらそうとしています。それを担う中国人研究者は、どのような経験の持ち主であり、どういう学問を軸足としているのでしょうか。果たして中国は、

「欧米/非欧米」をはじめとする二項対立を超えた、異なる開発学をつくることができるのでしょうか。

本講演は、このような問題意識に牽引されながら導かれた現段階の講演者の答えを示すものです。中国の開発学の形成と展開を 1990 年代まで遡って検討し、その特徴と葛藤を紹介します。それに加えて、開発学の構築をめぐる中国の試行錯誤を日本で発信する意味を、日本における開発学の系譜を踏まえながら考察します。

講演者は、アジアで学び育った一人として、開発学が内包する緊張関係に向き合う過程で培ってきた気力と方向感覚を用いて、これからも国際開発の「概念的インフラ」の修復・改装・刷新に取り組んでいきたいと思えます。本講演が、そのための具体的な研究関心と課題の共有、そして聴者の皆様との新たなつながりを築くきっかけになれば幸いです。

内容：

- ⑩ なぜ「開発学」なのか
- ⑩ 試みとしての『中国開発学序説』
- ⑩ 中国と日本のすれ違い・絡まり合い
- ⑩ 可能性としての非欧米社会の開発学